
That's all I have to give

美波可奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

That's all I have to give

【Nコード】

N8398F

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

灰かぶりと呼ばれたシンデレラは実は幸せの青い鳥だった…。

私からあなたへ 1

♪ That's all I have to give
♪ You still see that girl that
you found

♪ 立ち止まってるだけじゃ何も始まらない

真理の歌はよくかかっていた。

有線でも1位。ネットでも1位。

テレビでもよく出ていたから。

私は結構目にして。

ああ頑張ってるんだなってよく思っていた。

私は荷物の整理をしながらそういえばこのデビュー曲のカップリングを好んだ。

そうなんだ。

歌詞の通り立ち止まっても何にも始まらないから。

だからそう自分を騙しながら。

きつと生きていけるって思いながら。

泣けてきた。

どうして涙が出るの？

もう諦めたはずなのに。

外は雪だった。

変な時期の左遷。

まるで私のようなね。
自嘲気味に微笑んで。

真理は本当にそこにいるように歌っていた。

「さてと。」

私は誰もいない部屋から外を眺め。
そして机に白い便箋を出した。

有線の中で歌ってる愛しいたった一人の妹へ向けて手紙を書き始める。

真理へ。

元気そうで私は安心しました。

私は今隣町の栗町に着いたところです。

きっとあなたに相談すれば止められるのは判ってて。

きっとあなたに相談すれば私の一番欲しい言葉をくれるって知ってるから。

だから私はあなたに相談できなかった。

姉ちゃん男の趣味悪すぎっていつかあなたは言ったよね。

だけど私はあの人が好きなんだ。

本当に心から。

何処がって私が一番自分に聞きたいけど。
だけど。

私が人のことで泣ける唯一の存在なんだ。
裏切られてもでも大好き。

多分真理は姉ちゃんは馬鹿だと。
そう怒るだらうけどね。

真理は一矢君とどうか幸せになってね。
私の分まで。

私はこの場所で頑張ってみるから。
大丈夫。一人で頑張ってみるから。

どうかこの手紙をあの人には見せないでね。
ちゃんとあの人にはあの人宛に手紙を出すから。

だからお願い。
もう少しだけ時間を下さい。

ちゃんとするから姉ちゃんを信じてください。

愛しい真理ちゃんへ。
あなたの姉結花より。

追伸：あなたが姉ちゃん男の趣味悪すぎって言うから。
だからあなたが大好きな一矢君にあなたが居ないとき会ったんだよ。
真理は良かったね。
あなたの目は確かだ。
あんな良い人いないんだから。

絶対手を離すんじゃないよ。
私みたいになっちゃダメだ。

私からあなたへ 2

最後の方は正直悩んだけど。
でも出しちゃおうと封をした。

真理の見る目が確かだってそんな事はきつと判ってるって真理なら
言うだろうなって思ったんだけど。
でも私。

これでも真理の姉だから。

10歳も年上の姉だから。

——私が10歳の時真理が生まれて。
本当に可愛かった。

私は一人っ子にも慣れてたけど母が辛い思いをしてたみたいで。
私が生まれて本当は野球チームが出来るぐらい子供が欲しくて。
母は随分と落ち込んだって後から聞いた。

真理は小さくて本当に可愛くて。
嬉しかった。

そして小さい真理が生まれた後。

母が父に微笑んで言ったこと覚えてる。

「私たちには結花と真理で充分ね。」

どれだけその言葉を聞いて私は救われただろう？
私は母の泣いてる姿見るのが辛かったから。
そして私も幼かったから。

泣かないでよ。お母さんってずっと思ってた。

だから愛してないことなんて絶対無いって思ってる。

だから。だからね？

私は嬉しかったんだ。

真理が大きくなって私が高校生になる頃に言ってくれたこと。

「姉ちゃんなら大丈夫だよ。」

何気ない一言は私にとっては大きな支えだった。

だからあの頃の辛い思いだって乗り越えられたと今でも思う。

♪あなたがくれた勇気の言葉は私の背中を押してくれた♪

♪だからこれが勇気の証♪

♪踏み出せるはずさ♪あなたなら♪

気づけばもう外は暗くて。

電気を点けて手紙を読み返す。

これが私が進む第一歩だから。

もう逃げないから。

逃げたくはないから。

Love me for a reason 1

思えば私は逃げてばかりだった。

真正面を見据えて戦うって事が苦手だった。

だから空手は道場の娘のくせに初段どまりで。

父はそんな私が齒がゆくて。

私に辛く当たってばかりだった。

だから私はそんな父が大嫌いで。

お父さんがいくら望んだって私はほんくらだからこれ以上は無理だ
って。

いつも限界を自分で決めていたんだ。

好きじゃない空手だって嫌々させられて。

道場の娘なのに段持ちじゃないだなんて恥ずかしいってハッキリ言
われて。

私は別に良かったのに。

「だったら男の子産めば良かったじゃない。」って。

正直そう思ったけど。

母はなかなか授からなくて。

最後に授かったのが真理だった。

文句は人一倍あるけど私は争う事が苦手で。

ケンカが苦手で。

だからって思ってたら一緒に。

でも言えなかった。

母が泣く姿は流石に辛いつて思ったから。

私みたいなの1番手に負えないって父ははっきり言ったの今でも覚えてる。

その辺の不良の方がマシだつてそう言ったから。

私はやっぱり父が大嫌いだった。

だから私は余計に卑屈になつたんだ。

そんな私だから当たり前だけど中学でも高校でも目立つ訳でもなく。だからってグレル勇氣も齒向かう心だつて何もなかったから。

結局私はきつと1番手に負えないんだろう。父が言うとおり。

私が「彼」都さんに恋をしたのは忘れもしない中学2年の夏だった。確かあれは何かの委員会で私は代打で出る羽目になって。

その時の相手が都さんだった。

私は綺麗な男の子がいるってただそれぐらいにしかその時は思つてなかった。

だつて私は地味で目立たなくて。

男の子なんて顔を上げて見る勇氣すらなくて。

だから知らなかった。

横顔が意外に綺麗だつて事。

だから一目ぼれじゃなかった。

私が好きになつた瞬間は。

都さんが意外にクラスの女子に人気があつて。

私はその代打で出た委員会の所為で完全に女子の間で居場所を無くしたんだ。

元々在ってなかったような居場所だったけど。
もう空気を吸う事すら苦しくて。

判ってはいたけどクラスの女子どもの総スカンって結構堪えて。
きつと一人でも私を救ってくれる言葉を言ってくれる子がいたら私は都さんに惚れてないだろう。

そんな曖昧でも確かな気がする気持ちがきつと恋するって事だと思っから。

「お前らしい加減にしるよ？」
都さんだけがきつとね。

面倒だっただろうに私を救う言葉をくれたんだ。

私は有り難くて。

有り難くて有り難くて。

涙が出てきたんだ。

人に優しくされる事に慣れてないから。

都さんはそんな私を見てきつとさぞ呆れただろうと思う。

Love me for a reason 2

きつとね。都さんは誰でも優しく出来たと思う。
例え私じゃなくても。

そんな事は百も承知で好きになった。

きつと人を好きになるって本当に単純な事なんだと思う。

私なんか幸薄くて卑屈だから人を好きになることなんて一生無いだろうって思ってたのに。

こんなにも心が痛くて。

私はこの思いが叶わなくてもきつとずっと都さんを思っ生きていくんだろうつて思う。

真理が今でも言うんだ。

「姉ちゃんは今男の趣味悪いけど小さかった私の視線に下りてきてどんなに都さんを好きか語ってたね。」って。

そういえばあの頃の私は真理にしか言わなかったんだ。

私暗いから真理以外に話訊いてくれる人も居なかったんだ。
でも当たり前かも。

こんな卑屈な奴誰も話なんか聞きたくないししたくないよね。

でもね。

私にとっては大きな出来事だったんだけど。

私みたいな奴でも一応先生になりたいって夢があつて。

初めて担任を持った時だった。

生徒の家が丁度都さんの家の隣で。

私は生徒の家に用があつたものだから訪ねて行つて。

歸りにバツタリ都さんに会つたんだよね。

あなたは相変わらず私を総スカンさせた張本人の大鳥明美と家から出てきて。

私と目があつて。

「泉野。」

そうあなたの口が動いた気がしたんだ。

私にはあなたが大鳥さんと家から出てきたのもかなりショックで。別に告白した訳でも何でもなかったのに。

嫉妬だった。

嫌な感情が湧いてきたんだ。

一刻も早くその場から逃げたかった。

——— だけどあなたは私の腕を掴み。
振り向かせてキスをした。

Love me for a reason 3

それ以降のことは殆ど覚えてないんだ。

ただ判ったのは私は大鳥さんを追いかけて交差点に飛び出したんだって。

それでそれが原因で私は入院を余儀なくされて。

子宮が衝撃で潰れてしまったから摘出手術を受けたんだって連絡を受けて驚いて来た真理が言ってた。

その頃は母は父の世話で大変だったものだから顔を出してもすぐに真理に託して帰ってしまうんだ。

真理はその頃バンドでデビューしたばかりだったものだから私なんか本当は心細いくせに虚勢を張って。物分りの良い振りなんかしちゃって。

「真理ちゃん。もう私は大丈夫だから。」

そう言った途端頬を容赦なく叩かれて。

「姉ちゃんは大馬鹿だ。」
そう言われた。

「家族が大変な時に休めもしない職場なら私は悔いなく辞めてやるよ。」

そう真理は力強く言ったから。

情けなく涙が出てきた。

何だかだって実感湧かなくて。

「私。本当にもう赤ちゃん生めないんだよね。」
別に子供が生めるから偉いとか。

そういうことじゃないんだけど。

「子宮が潰れたって医者は言ってたよ。」

眞理が眉根を寄せ。

そう言っただから。

私は。

「そっか。」

そうしか言えなかった。

ジンジン痛むのはお腹の傷の所為だけだろうか？

「姉ちゃん？」

「うん。ごめんね。ちょっと疲れたみたい。」

私は布団を被り泣いたんだ。

別に自分を哀れんでる訳でもなかったのに。

後から後から涙がとまらなくて。

左手に金の指輪 1

翌日あなたは息せぎつてやってきた。

あなたらしくなくゼーゼーハーハー言いながら。

あなた言葉で言うと言だせ〜〜って言うの？（笑）

あなたは斜に構えて。

何が起きても動じずに。

それこそ私のことなんか名前すら覚えてないでしょ？

「泉野。ごめん。」

あなたは息を整えてそう言った。

何がごめんなの？

サッパリ判らないんだけど。

だって私が勝手に大鳥さん追いかけて。

それはそれはきつかけは確かにあなたで。

あなたのキスが事の発端で。

だけど私はあの時確かに心の何処かで喜んでいたんだ。
だって私は有段者だから。

腕の覚えのないあなたが私の利き手を封じたとしても。

投げ飛ばすぐらい訳が無いから。

知ってる？私喜んでたんだよ。

浅ましい私は喜んでたんだよ？

あなたのキスが最高に嬉しくて。

他の人がどう思おうが私はこの人が好きだって。
確かに確信した瞬間でもあったから。

そして。

本当はあの時ダンプカーに飛び出したのは勢い余った私だった。
大鳥さんは間一髪のところまで車道には飛び出さなかったんだ。

だから今まで習ったはずの受身さえ何処かへ飛んでしまっていて。
本当は私が全部悪いんだ。

でも人にはね。

きつと私が大鳥さんを庇ったように見えたかもしれない。
だけどそれは違う。

故意でもない。

だけど私は自分で自分のことをよく知ってるから。
人を庇えるほどの勇氣は私は生憎持ち合わせてないから。

「…私。もう子供生めないんですって。」

お腹の傷は痛くて。
ジクジク心も痛む。

「…お前の主治医から無理やり聞きだしたよ。」

「…っ！！！！」

私は息を飲んだ。

誰よりも知られたくなかったよ。あなたに。

「…もう放っておいてください。頼むから。」

これ以上あなたを恨ませないで。
あなたの事恨んじゃうよ。
私嫌なやつだから。

「泉野。」

あなたは。

あなたは静かに私の苗字を呼んだ。

夕焼けが目に染みる。

「泉野。付き合ってもらえないかな。」

あなたが差し出したのは金の指輪だった。

情けなくて。

情けなくて情けなくて。

私は受け取れもしなかった。

でもあなたは強引に私の左の薬指に指輪を嵌めて。
言ったんだ。

「同情じゃないから。」

…どれだけ嬉しかったことか。

左手に金の指輪 2

「私は。」

都さんが強引に私の指に嵌めて帰った金の指輪を見て、
呟いた。

「私はそんなに強くも綺麗でもない。」

ましてや大鳥さんの後を追ったのだから、打算かもしれないのに。」

そこへ真理が入ってきた。

「今の姉ちゃんのアレ？」

下品な仕草で真理が聞くから。

「真理。アレって言うの止めなさい。」

姉ちゃんぶって言うてしまった。

真理は凄い形相で私を睨んで。

「姉ちゃん男の趣味悪いから。」

溜息をついて。

ただの14歳の少女なのに私を見る。

「だって何だってあんなのに惚れるわけ？」

わっかんないんだよな。」

そうかもしれない。

見るからに遊び人のあの人と。

私はつり合わないかも知れない。

だけど。

だけど夢でも良いからあの人の心が欲しかった。

綺麗なあの人の瞳に一瞬でも構わないから。
私の姿を映して欲しかった。

「都さんが指輪くれたの。
付き合おうって言ってくれたの。」

「バカじゃないの？」
真理は一言そう言った。

「そんなの本気にしてんの？」
真理の言葉は痛かった。
痛くて痛くて。

「良いじゃない。夢ぐらい見させてよ。」

「夢見るのは勝手だし？ 傷つくのも勝手だけどそれ以上姉ちゃんは
何を望むの？」

ただ自分を憐れんで。
傷つかないように何もしないでいるだけじゃない。
少しぐらい傷ついても私はあんな奴本気で惚れるんなら言葉を紡
げよ。」

真理は。

この時大変な時期だったのを私は知らなかった。
真理は何も言わなかったから私は何も聞かなかった。
それがいいと勝手に思ってたから。

「姉ちゃんには感謝してるよ？」
なんせ10も離れた妹がグレチャツテ姉ちゃんは辛かったよね？」

辛くなんかなかった。

私は真理に救われたんだから。

学生時代のあの総スキャン食らってた時代。

私は真理がいたから願ってた。

いつかは暗黒も晴れるって。

根拠はないけど願ってた。

真理が団に加わって金髪にした時も。

驚いたけどずっと待ってた。

目が覚めることを。

そんなことしても何もならないっていつか気づくって。

「姉ちゃん。いつからあいつ好きなの？」

「あいつ」と言ってから真理ははっと気づいて言い直した。

「あいつ。都さん？をいつから好きなの？」

私は。

金の指輪を触って。

「もう覚えてないぐらいに。」

そう言って笑った。

そう私は都さんが純粹に好き。

ただそれだけだった。

ココロ 1

それからの私の生活はそれまでとそんなに劇的に変わったわけではなかったけれど。

少なくとも私は真理に言われたみたいに前向きに歩いてみようと思った。

傷つくのは嫌だし怖いけど。

でも私は都さんが好き。

それだけで多分いいんじゃないかって思えたから。

都さんは私にそれから婚姻届を渡しに来た。

それは本気の証しのつもりで。

私にとっては涙が出るぐらい嬉しかった。

続木都。

あなたの名前。

泉野結花。

私の名前。

印鑑を押して市役所に出せば晴れて夫婦という絆が芽生える。きっとそれでいいんだって思ってた。

けど違ってた。

私は浅はかだった。

それに気づかせてくれたあなたのお母さんに感謝してるよ？

あなたのお母さんはあなたが私に婚姻届を渡しに来た翌日大輪の花を持って現れて。

私に涙ながらに訴えたんだ。

「あなたが泉野さん？」

私はあいにく採血を終えて。

戻ってきたときにあなたのお母さんとぶつかって。

あなたのお母さんだってすぐにわかったんだ。

だってこんなにもあなたに似てるから。

「はい。えゝゝと都さんのお母さま？」

私はその時は軽く考えてた。

あなたが私のことをフィアンセだって紹介でもしてくれたのかなって思ってた。

「もう大丈夫なの？」

傷のことなのかと思って。

「ええ。まだ痛みますけど。」

そう少し笑って答えた。

そしたらね。あなたのお母さん私に言うんだ。

「都をもう自由にしてやってくれませんか？」って。

私には正直意味が判らなかつたし。

何のことなのかと問おうとしたら。

遮られるし。

「都は大事な一人息子なの。」

そこまで聞いてやっと意味が判ったんだ。
私との付き合いに反対してるってことが。

「勝手だけど都にかわいい子供を見せてほしいの。」

ああ。そうかって。

不思議と腹は立たなかったんだ。

だって涙ながらの都さんのお母さんはあなたと一緒にきれいだったから。

私は判りましたと言うしかなかったんだ。

私は決して物分かりがいいわけじゃないし。

私は決していい人間じゃないから。

でも頭のどこかでこの人を責めちゃダメだって思ったんだ。

こんなにも都さんを愛してる。

気持ちだけじゃどうしてだめなの？

でもきつとそこで何も言えなかったのは私が強くもきれいでもない。

浅はかな人間だって知ってたからだと思う。

「お大事に。」

あなたのお母さんはそう言い残して病室から出て行った。

私はあなたのお母さんが帰ってから大声で泣いたんだ。

だって酷過ぎるじゃない？

ココロ 2

それから。

それから私は退院の許可が出たから真理にだけ告げて退院した。

手にはあなたからもらった金の指輪と。

あなたからもらった婚姻届。

婚姻届はどうしても破れなかった。

だから一番大切なものを直すところに置いておこうと思う。
多分一生使わないだろうけど。

私が死んだら一緒に灰にしてねだなんて縁起でもないことを思う。

だって。辛かったから。

単純に深く傷ついたから。

私にはもう都さんの顔を見ることもできないと思う。

顔をあげて見上げたら。

きっと。

私は嫌な感情に左右されて嫌なことを口走るだろうから。

私はね。誰も恨みたくなかったんだ。

だからね。あなたのこと好きすぎて恨みたくないんだ。

だからあなたには私の行き先は言わない。

勤め先だって言わないから。

もう私のことは忘れてほしい。
頼むから。

私はあなたのこと多分一生覚えてる。
こんなに好きになれるだなんて考えなかった。

そして私は復職したんだけど。
私の席はこの時はまだあつたんだけど。

だけど神様はやっぱり意地悪で。
私にはそれに耐えられるだけの意志はないのに。
運命は過酷で。

こんなに地獄はそうそうないと思ってたのに。

私が話を聞いてあげられなかったから。
討たれ弱い母はビルの屋上から飛び降り自殺をしてしまった。

正直こんなことになるだなんて思いもしなかった。
心が折れてしまいそうだった。

何で私の家にだけこんなに不幸続きなの？
どうして悪いことしてないのに神様はこんなに意地悪なの？

自問自答は続いて。

私が母の飛び降り現場に行った時は警察沙汰も甚だしくて。
遠くで見えた真理を見たとき。
目の前が暗転した。

Like Cinderella 1

本当は私が真理を気丈に助けなきゃならなかったのに。
私はなんて弱い人間で。

多分私なんかには助けられたら真理は終わりだと言っただろうけど。

気づけば見たこともない病院とも違う白い天井が見えて。

地獄って案外地上っぽく俗っぽいんだなって馬鹿な事を思っちゃった。

本当に何にも怖くなかった。

もう失うものは何もないから。

何かの本で読んだことがあって。

地獄へ行く前に天罰が下るんだって。

私にはそれでもいいと思った。

母じゃないけどそれでもいいと思った。

天罰が下ればきつともう体は粉々になって。

魂だけが残って。

未練はないと言いたいけど。

一度でいいからあなたに好きだと言いたかった。

そう思った。

きつともう完璧遅いだろうけど。

俗っぽい天井から眼を下に向けると。

何とあなたがきれいな瞳を閉じて腕組んでいたんだ。

私には目の前の光景が信じられなかったよ。

俗っぽい天井は地獄じゃなくてあなたの部屋の天井で。

天罰が下るだろうと勝手に死んだと思ってた私は生きていて。

あなたが目の前にいて。

手を伸ばせば届きそうなもので。

「っ！！！！！！！！」

驚きのあまり声も出なかった。

そして知らず涙があふれて。

私はあなたが見てないことをいいことに大泣きしたんだ。

そして初めて神さまに感謝したんだ。

私にまだあなたを好きだという機会を与えてくれたって。

まだ生きてていいんだって。

Like Cinderella 2

あなたはそんな私に気づいて。

あなたは私にあなたの部屋の鍵をくれた。

それは単純に私に自分のテリトリーに入っていていいと暗に示してくれた証しだった。

だけど私には素直に受け取れなかった。
なぜなら。

私が姿をくらまそうと思った直接の原因は電話の内容でも何でもなく。

ただ私には学校から辞令が下ったから。

年明けの中途半端な時期の辞令で。

本当ならいくらなんでも突然で酷すぎると抗議してもいいぐらいの内容だけど。

私には何も言えなかった。

だって教頭が瞳を腫らして言ったんだ。

「泉野さん。私の力不足でごめんね。」と。

私に辞令が下ったのは仕方がないことで。

直接の原因は諸事情によることだけど。

本当は大本は私の両親の自殺事件と。

妹の真理がスキャンダルを起こしたことと。

もちろん真理のは単なるマスコミの早とちりだったんだけど。

何にしる生徒に示しがつかないからと私に辞令が下ったんだ。

だけどね。私はやっぱり母の娘で。
都さんには何も相談できなかった。
頼りにしてないんじゃないかと。

やっぱりあなたの隣を私が歩いていいのかどうなのか判らなかったんだ。

あなたからはちゃんと言葉と指輪と婚姻届をもらったよ。
けどそんなんでいいとは思えなかった。

自分たちだけ幸せなら他の人を不幸にしてもいいとは思えなかった。

都さんのお母さんは依然として私との付き合いに反対してるって言うし。

それならって私は思ったんだ。

もうこんな関係終わりにしようって。

もうだってあなたにだって好奇の目は降り注がれるのは時間の問題だって判ってたから。

だから私は完全に湊府を引き上げる日を選んであなたの実家に行つたんだ。

あなたがくれた指輪とあなたがくれた婚姻届を返して。
もう自由だと。

あなたの息子さんはキズものじゃないからって。

私は無傷であなたの息子さんをあなたに返しますって。
ちゃんと笑って言えたつもりだ。

そして心から「どうか幸せになって。」と祈った。

ENDING

そして私は南へ下り。

時期外れの左遷をされた私が赴任した中学校では私を愛してくれる人に出会った。

何も心配もなく子供の産めない私にそれでもいいと理解を示してくれた。

その人のお母様もとてもいい人で私を心から迎えてくれた。
今迄のように息苦しいこともなかった。

ここにいてもいいの？って問いかけることもなく心から愛してくれた。

それは私が人気ボーカリストの姉だからとか。
そんな関係なく。

そして自殺した両親をもつことにもちゃんと理解してくれた。

これ以上何を望むことがあるだろうってぐらい。

…だけど。

本当は私は幸せじゃなかったから心から好意を受けられなかった。

私はあれから住所を書けずに都さんに手紙を出した。
あれだけ真理にも偉そうに手紙を書いて出したのに無理だった。

事のあらまし。

私がどうして消えたか。

左遷にあったこと。

あなたに相談できなかったこと。

頼りにしてないんじゃないかと頼りにすることへの罪悪感。
あなたの隣を歩いていいか本当は全然判らなかったこと。

いろいろ書いて10枚以上の長い手紙になつて。

最後に住所を書こうと思ったらどうしても書けなかったんだ。
ポストには勇気を振り絞って出したんだけど。

だから住所は伝えられなかった。

もちろん真理にも言えなかった。

真理を頼れなかった。

意地張りでどうしようもないな。私は。

それを読んで都さんはどんなふうに思うだろうとか。
まったく思わなかった。

そして私は私を愛してくれる人に返事をしに行った時のことだった。

「結花!!!!」

声が聞こえた。

…振り向くと息せぎつて駆け寄ってくるあなたの姿が見えたんだ。

私は。

私は考える間もなく駆け寄って抱きついた。

一世一代の叶うはずもないと思ってた恋。
叶うわけがないと思ってたのに。

T
h
a
t
'
s

a
l
l

I

h
a
v
e

t
o

g
i
v
e
)
♪

真理の歌どおりだね。

終。

ENDING (後書き)

都編へ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8398f/>

That's all I have to give

2010年12月11日02時26分発行